

九州大学

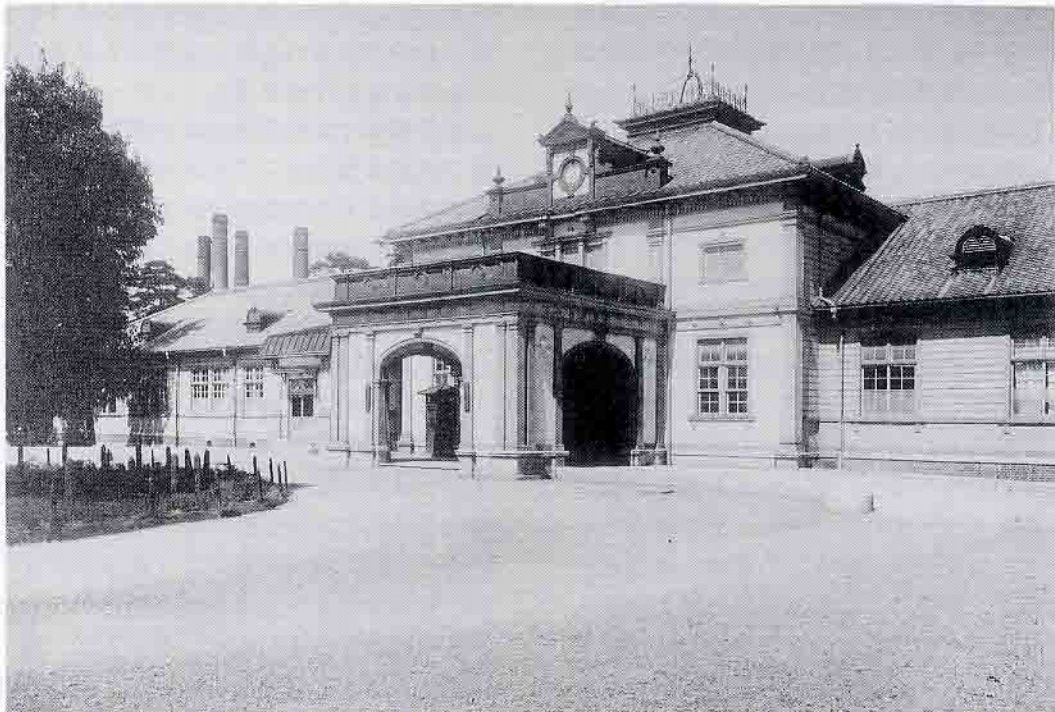
大学史料室ニュース

第3号

1994. 3. 10.

目 次

学術資料におもう	2
史料紹介(3)	4
沿革史紹介(2)	6
九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿	7
受贈図書一覧	7
大学史料室日誌抄録	8



九州帝国大学附属医院入口

九州大学の附属病院は、1903年(明治36)4月、九州大学の前身である京都帝国大学福岡医科大学の創設に際して福岡県から寄付されたものである。1896年(明治29)福岡県立病院として建設されたもので、このとき福岡県から寄付されたのは、敷地2万9551坪、建物3262坪余、58棟であった。写真はその正面入口で、正門から入って右側、現在の歯学部附属病院の位置にあり、向かって右側が内科、左側が外科であった。昭和の初めに内科や外科が新しい建物に移転すると、歯科口腔外科学教室や医院事務室が一時これを利用していましたが、右側は歯科口腔外科学教室の建設予定地となって取り壊され、左側も1937年(昭和12)に現在の中央事務室が完成すると、医院事務室が移転して取り壊された。

学 術 資 料 に お も う

— 自然史資料によせる感慨 —

柳 田 壽 一

去る日、大学史料室の方からお電話があり史料室ニュースへの投稿依頼を受けました。それより少し前史料室ニュース第2号を頂いていたので、その内容を思いおこし、とてもそれにふさわしい資料の持ち合せがないのでと辞退申しあげました。しかし受話器のむこうでは、私が総合研究資料館設置準備委員会に係っていることを承知の上で、さらなる要請があり、随筆的のもので結構ですからとの補足もありました。その時点で何が書けるか見当もつかなかったのですが“総合研究資料館”の名が出た以上辞退はできないなどの思いが走り、承諾してしまったような次第です。

私の研究分野で扱う“史料”は自然史の資料ですが、本学の学史の中で大変重要な位置を占めております。総合研究資料館設置準備委員会では、文化史・自然史・学史に係る資料を3本の柱と考え建設推進の努力を続けて参りました。さて、本学の発展史の一翼をになう自然史の資料にまつわるエピソードにそえて、学術標本によせる熱い思いを少々述べてみましょう。

すぐる昭和40年代の後半、大学紛争の嵐が日本全土に吹きあれていた頃、私共の教室（当時理学部地質学教室）では学術標本の保全に大変神経をとがらせていました。特に化石を扱う古生物学の分野では、国内及び国外の各地で教室の創立以来収集されてきた化石標本が数ヶ所に分散して保管されておりました。それらはすでに公表済のタイプ標本を含む重要標本・研究中の標本・研究準備中の標本などと研究の進捗状態に応じてまとめられてはありましたが、中にはその気になれば容易に持ち出されうるような状態のものも沢山ありました。何しろ化石は岩石中に保存されているため、“投石”には手頃のサイズのものが多いのです。今では考えられないことですが、国中の大学が未曾有の状況下にありましたから、資料の保全対策に頭を痛めたのでした。特に心配したのは理学部門に近い道路脇にありました木造平屋の建物で、その一室が標本倉庫として当時使用されておりました。中には卒業論文や修士論文に係わる研究資料が多かったのですが、それらは運搬箱にぎっしり入り積み重ねられていました。窓や入口ドアの

施錠だけは嚴重にしたものの、誰も当時の状況のもとではいざとなればひとたまりもないことは分っていました。他に思案がないので、万一の場合を考え模造紙に毛筆でたしか次のようなことを大書し壁にはっておきました。「ここに収蔵されている標本類は、地質学科の学生が卒業研究にあたり、大変苦勞して採集した学術的に大変貴重な資料です。どうかこれには手をふれないでください」。この他各人が研究中の資料のうち不測の事態が予想されるものについては“疎開”をさせることになりました。私もその時化石標本を1個ずつ古新聞に包み段ボール箱につめ、当時理学部にあたりヤカーに積んで香椎の自宅迄運び、アパートのベランダの隅にかなりの期間積みあげましたが、その時のやりきれなかった気持ちは今でも生々しくよみがえってきます。

学術標本や資料が暴力により無雑作に破壊されること位人類にとって大きな悲劇はありません。その最たるものは戦争であり、太平洋戦争の際国内の大学や研究所において、学術資料にまつわる悲劇が各地で生じた話にはこと欠きません。外国においても戦火によって貴重な資料が焼失した記録は、私の関係する分野だけでも18世紀にまで逆のぼることができます。

私の場合研究対象が動物化石なので、分類や命名法、タイプ標本の保管などについては、国際動物命名規約に従うことになっています。この規約の中で、特に模式（タイプ）標本の保管については、管理者において最大限の努力が払われることが強く要請されています。たとえば、種グループの模式に関する規定を眺めると、模式の価値として“完模式・総模式・後模式・新模式は動物学者全体、およびこれらを安全に保管する責任ある当事者にとって学術上財産として尊重されるべきものである”と明記してあります。また勧告の中で研究機関の責任として“模式を提供されたすべての研究機関は次のようにすべきである”としてあげられた項目の中に、“安全な保存のために必要なあらゆる手筈を講ずること”という事が明記されています。その他保管に当って研究機関のとるべき義務条項が幾つか明示してあります。要する

に登録番号を付して記載公表された模式標本は、研究機関で永久に保管され、研究者のニーズに直ちに応じられるよう手配りがなされていなければならないということでもあります。

自然史の資料に関連して今一つ忘れがたい記憶があります。このエピソードは本学で学術資料の保全についてそのあり方を考える時、色々な点で大変示唆に富んでいると思いますのであらためて紹介します。この事件はカルスト地形で有名な山口県の秋吉台で昭和31年に生起しました。秋吉台は秋芳洞と共に石灰岩がおりなす特有な景観でしられ、それはまさに自然の遺産であります。その特有な地形は訪れる人々の目をうばいます。そこにはまた特有の植物や動物が生息しており、“無数”といい位台上に散在するタテ穴の底の泥土の中からは、日本で現在みることのできないサイ・トラ・各種のゾウ・オオツノジカなど大型動物の骨格が発見されます。さらに台上に広がる羊群のような石灰岩ラピエの中には、石炭紀やペルム紀など約3.5億年～2.3億年前の熱帯の水産動物の化石を作っていた、底生生物達の無数の遺骸が化石として存在します。秋吉台は特に日本の地質学や古生物学の発展の上で、極めて高い貢献をいたしましたし、現在もお研究者達にその汲めどもつきぬ資料を提供しつづけています。現在この地は、東の台とよばれる東半分の主要部分が、特別天然記念物として国の保護のもとにあり、台上では一木一草に至る迄勝手に扱うことは禁じられています。特別天然記念物の指定は、昭和31年3月に生起した事件を契機に、その落着と共に実現しました。

私の手もとに山口県と同県秋芳町及び美東町の3者によって刊行された小誌があります。その表紙には「秋吉台大田演習場小誌一爆撃演習解除記録一」とあります。この小誌には、秋吉台が米軍の爆撃演習場になりかけたことに端を発し、官民一体となってその自然と景観を破壊から守り抜いた人達の戦いの記録が細大もらさず記されています。この反対運動は、最初地元の秋芳町や美東町で起り急速にその輪が広がっていったのですが、その間であってこの地と研究上深い係りのあった研究者達も最初からこの運動に加わり、色々な形で活躍されたことも特筆に値します。その中には本学名誉教授で、私の恩師でもある故鳥山隆三先生の名も見られます。先生は地質学者として純粋に学問的立場から、このかけがえのない遺産を守らねばと反対運動にとびこんでいかれたのでした。この御尽力の結果は、反対運動の輪が国境を越えて米国に迄及び、彼の地の著名な地質学者達の協力を得るにまで至り、次第に大きな力となり、学

術会議が動き、国会が動き、時のアリソン駐日米国大使をへてアイゼンハワー米国大統領に迄達し、結局約10ヶ月後の31年11月に至って、ついに秋吉台を爆撃演習場に使用しない旨の回答を得るに至ったのです。このような、山間の小さな町に始まり、ついには国際的な輪に迄ひろがり見事に実を結んだ運動はまさに空前にして絶後であります。

この小誌によって往時をしのびますと、米軍の爆撃演習予定地は現在特別天然記念物に指定されている地域のほぼ中央に当たります。演習区域は同心円で3区域に分けられ、着弾区域が中央の半径1.5kmの円内に、その外側に1.5kmの巾で危険区域がそれぞれ設定され、一番外側に1.5km巾の円で示される安全地域が設定されています。演習実施要領によれば、単発ダグラスAD型機による対地銃爆撃演習を実施するのが目的で、使用弾種は実弾は機関銃(50ガリバー、20ミリ)、ロケット(2.25インチ)を使用する。爆弾はすべて砂を充填した演習模擬弾(3ポンドと25ポンドの2種類)を使用する。弾着を明示するため発煙装置を施してあるが危険はない、とあります。

秋吉台の自然は四季を通じて美しく、平和そのものであります。勿論終戦迄は旧日本陸軍の演習場としても格好の場所であったようですが、兵士達の匍匐前進や突撃の訓練にもっぱら使われていたようです。ですから秋吉台の自然は何とか現状を維持されてはいたのです。戦後連合軍の占領下にあった頃、秋吉台の一部が演習場として接收され、ニュージーランド軍が射撃演習に使用していたのを米軍が航空機を使っての射撃場にとってかえようとしていたわけです。

秋吉台が特別天然記念物としてある限り、その自然は保全されていくでありましょう。現在台上には特別天然記念物と記した標柱と、それを記念して設立された秋吉台科学博物館が訪れる人の目をひきます。かつて著名な米国の古生物学者はこの地を訪れ、世界中で一番美しい場所にある博物館と申されました。秋吉台と秋吉石灰岩を研究対象とする研究者は絶えることがなく、その地質は日本列島形成の地史を追求する上に極めて重要な資料を提供し続けています。彼の地から収集された学術資料は尠大なものがあり、それらは国際的にも、学術的に極めて高い評価を受けています。

自然史の“史料”をもとに学術資料に寄せる熱い思いの一端をのべてみましたが、本学が所蔵する世界に誇り得る沢山の資料・標本が全学的に保全され、それらが有効に利用され、そこから新たな研究が展開しますよう祈ってやみません。

(九州大学理学部教授)

九州大学時報

現在、わが国の大学ではほとんどの大学で広報誌が刊行されており、九州大学も『九大学報』と『大学広報』の2つの広報誌を刊行している。

『九大学報』は毎月1回発行される月刊の広報誌で、関係法令、学内規程、学位授与、受託研究、人事異動などの情報を毎月伝えてくれるとともに、研究室から、海外レポート、随想、学内散歩などの読物も掲載されていて、その発行を楽しみにしている方も少なくないと思われる。また『大学広報』は、発行は不定期で、現在では公開講座や講習会などのお知らせ的なものを中心となっているが、発行された1969年(昭和44)当時は、大学紛争関係の記事を中心にほぼ毎日のように発行されており、月1回発行の『大学広報』では間にあわない情報を学内に周知することを目的としたものであったことがわかる。

この2つの九州大学の広報誌のうち、『九大学報』は、大正期に創刊された『九州帝国大学時報』を前身とするもので、数あるわが国の大学の広報誌のなかでもっとも古いもののひとつであろうと思われる。

『九州帝国大学時報』(以下『時報』と記す)

は、1924年(大正13)1月に創刊された。B5版、縦書き、2段組で、第1号は附録も合わせて6頁である。毎月1回、20日に発行され、この日が休日のときはその翌日に発行されることになっていた。掲載記事は、詔書、法律、勅令、省令、文部省訓令、文部省告示、本学達示、叙任及辞令等であり、彙報として官庁事項、学位授与、講習会・講演会等の案内、在外研究員帰学及出発、寄贈、附属病院の入院及外来患者人員、学士試験合格者などが掲載されている。文部省が4年前の1920年(大正9)5月に、「本省行政ニ関スル法令並諸般ノ施設事項ヲ周知セシムルヲ目的」として発刊した『文部時報』にならって創刊されたもので、「時報」という題名だけでなく、記事の内容やそのスタイルなどもこれを踏襲している。

ところで、この『時報』の創刊は、同じ頃に実現した学内印刷所の設置と密接な関係をもっていた。大学が学内に自前の印刷所を持っているのは今日ではきわめてめずらしいが、当時、福岡には印刷業者も少なく、欧文はもちろん和文による学術用雑誌の組版もできなかった。研究発表用論文の印刷はすべて東京・大阪方面の業者に発注しなければならなかったのである。このため、1921年(大正10)10月の評議会で、本部留置予算1万余円をもって印刷所を設置することを決定し、12月6日付をもって九州帝国大学処務規程を改正して、印刷所を置くことにしたのである。

印刷所を学内に設置するにあたっては、「各学部ノ需ニ応シ印刷ヲ引受クレハ、殆ト実費ニ均シキ低価ヲ以テ供給シ得ラルヘキニ依リ、大学全体ノ上ヨリ見テ、単ニ不便不利ヲ排除スルト云フバカリニアラズシテ、経費節約ノ上ニモ其効果鮮少ナラズ」と、単に印刷の技術上の問題だけでなく、経費の問題も考慮されていた。そして、印刷所においては、「各部局ニ於ケル普通ノ印刷物、講義用印刷物ノ印刷及製本ヲ引受クルコトトシ、差当り左ノ事業ヲ行ヒ漸次拡張ヲ為サン」と、当面、石版および写真版の印刷、活版印刷、コロタイプ印刷、製本を行うこととしたのである。

印刷所はしばらくのあいだ工学部の製版室を利用することとし、1922年(大正11)3月までに準備を整え、4月から印刷の業務を開始した。当初の計画では、1921年(大正10)から1922年(大正12)の3か年で活版印刷器械等の器械を買い入れ完成を



『九州帝国大学時報』第1号

はかることになっていたが、外国に注文した器械類が予定どおりに到着しなかったことなどもあって、完成は1924年（大正13）にずれ込んだ。したがって『時報』は、印刷所の完成とともに創刊されたということができるのである。

『時報』は、創刊の翌年の1925年（大正14）1月6日発行の第13号から、5日、20日の月2回の発行となり、翌1926年（大正15）1月6日発行の第37号からは、5日、15日、25日の旬刊となった。この頃から1年間の頁数は200頁前後となり、1941年（昭和16年）には270頁と最大になっている。

しかし、戦争の影響が深まると印刷用紙の節約が求められるようになり、1943年（昭和18）1月11日発行の第649号からは、発行日が10日、25日の月2回となり、版組もそれまでの2段組が3段組に改められている。こうした努力によって、この年の頁数は139頁と前年の約半分になっている。

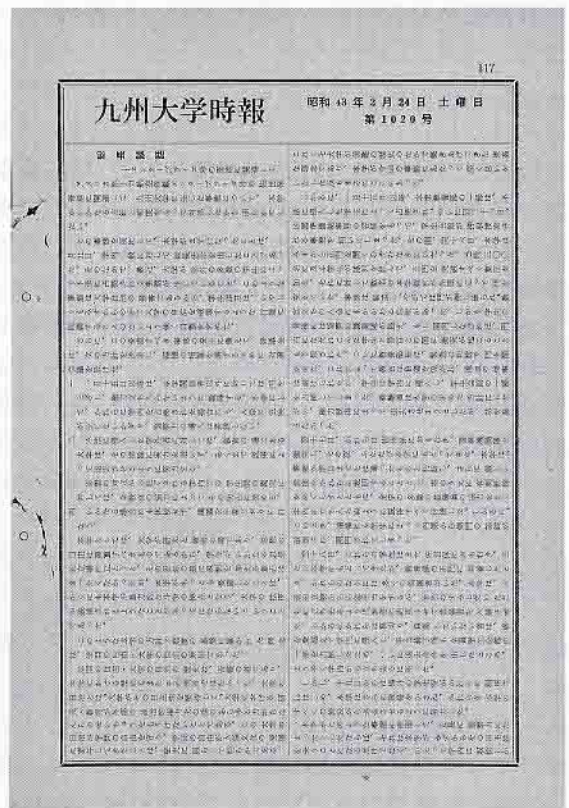
この年は頁数が削減されただけで、内容的にはそれまでとあまり変化はなかったが、翌1944年（昭和19）には、内容的にもそれまで彙報に載せられていた寄贈や毎月の電力消費量、図書閲覧人員及閲覧書冊数などが載せられなくなっている。

戦後は、1947年（昭和22）10月に九州帝国大学が九州大学に改められたのに伴い、10月25日発行の第762号から、『九州帝国大学時報』が『九州大学時報』に改められているが、印刷用紙の不足は戦争中よりも戦後の方が深刻であったようで、この年の『時報』の頁数は60頁となり、翌1948年（昭和23）は45頁と最低を記録している。

また、1946年（昭和21）までは月2回の発行が守られていたが、1947年（昭和22）11月25日発行の第765号は12月10日との合併号となり、これ以後、合併号が目立つようになる。頁数は、1948年（昭和23）に最低を記録したのちは、年を追って回復していったが、発刊日は形式的には10日、25日の月2回であったものの、実際は合併号が多く、実質的には月1回の発行となっていた。

こうしたこともあってか、1957年（昭和32）4月25日発行の第891号から『時報』は毎月1回、25日の発行となり、版組も縦書きの3段組から横書きの2段組に改められた。以後、『時報』は基本的にこの形態を守っていたが、1968年（昭和43）2月の第1020号をもって『時報』の名称は廃止され、内容的にも充実されることになって、同年4月の第1021号から現在の『九大学報』に引き継がれた。

ところで、『時報』は創刊当初から学位論文審査要旨を別巻として発行していた。学位論文審査



『九州大学時報』第1020号

要旨を掲載した別巻の内容は、1924年（大正13）の目次には記されていないが、翌1925年（大正14）からは掲載されるようになっていく。この学位論文審査要旨は、1940年（昭和15）までは別巻として発行されていたことは目次などから確認できるが、1941年（昭和16）からは目次にみえなくなり、発行されたかどうか確認できない。この頃は、戦争のため印刷用紙の節約が厳しく求められていた時期であり、発行されなかったのではないかと考えられる。

戦後は、1952年（昭和27）10月25日発行の号外から学位論文審査要旨が発行されていたことが確認できる。これ以後、学位論文審査要旨はしばらく『時報』の別巻として発行されていたが、1962年（昭和37）11月1日には、『九州大学時報別冊』第1号、『博士学位論文内容の要旨及び審査の結果の要旨』として発行された。この『博士学位論文内容の要旨及び審査の結果の要旨』は1968年（昭和43）1月発行の第22号まで『九州大学時報別冊』として発行されていたが、同年4月発行の第23号以降は、『時報』の名称がなくなったのに伴って、『九州大学時報別冊』という文字はなくなり、単に『博士学位論文内容の要旨及び審査の結果の要旨』として刊行が続けられている。（S）

沿革史紹介（2）

九州大学農学部五十年史

1971年10月刊行。A5版。横書き。272頁。農学部の創立50周年にあたる1971年8月1日までの歴史を記したもの。九州大学では医学部の『二十五年史』『五十年史』に次ぐ2番目の部局史である。

あとがきによれば、執筆の依頼から締切まで1カ月という短期間で原稿が集まったとあるが、4年前の1967年11月に、『九州大学五十年史』の学術史が刊行され、農学部についても、創立から1961年5月までの事柄が193頁にわたって記されており、このときの経験が本書の編集に大いに役だったものと思われる。事実、第1章として最初に農学部通史を置き、以下各章ごとに各学科の歴史を講座別に記すなど、同書の記述方法をそのまま踏襲しているところが多い。しかし、同じA5版であっても、頁数が約1.5倍、1頁の行数が25行から30行と、その量は大幅に増えており、単にその後の10年分を追加しただけのものとはなっていない。とくに各講座の歴代教授の写真など、50年史には使用されていない多くの写真が収録されている点は本書の大きな特色となっている。

筥崎松原の青春

1978年11月刊行。A5版。縦書き。515頁。法文学部創立50周年、経済学部独立25周年を記念して編集されたもの。思い出の記、座談会、経済学部の歴史の3部からなっている。

本書の最大の特色は、最初に置かれ分量的にも8割以上を占める思い出の記である。卒業生、元教官・事務官等、125名が執筆しており、経済学部の歴史の多彩な側面をそれぞれの立場から生きいきと伝えている。座談会は、名誉教授思い出を語る、太平洋戦争頃の思い出の2つで、思い出の記とはまた違った形で戦前期における経済学科を含む法文学部の雰囲気伝えている。経済学部の歴史は、巻末に置かれ、分量的にもそれほど多くはないが、経済学部の50年間の歴史をそれぞれの時代の背景を踏まえながら要領よくコンパクトにまとめている。

普通考えられる学部記念史とはまさに反対の方向で編集された部局史であり、標題にふさわしいユニークな部局史となっている。

九州大学教養部三十年史

1984年3月刊行。A5版。横書き。532頁。教養部創立30周年にあたる1979年度末までの事柄を記している。第1編総説、第2編通史、第3編教室史、第4編資料・年表の4編からなる。あとがきにあるように、体裁は『九州大学五十年史』に範を求めているが、内容的には独自の特色を有している。

第1編総説は、戦後新制大学の発足とその諸問題と題され、戦後の教育改革において発足した新制大学と一般教育の問題を説いている。第2編通史は、10章に分けて時代を追って記しているが、第5章に各分校出身者の座談会、第10章に現教官、旧教官・事務官、卒業生の座談会が含まれているのが特色となっている。第3編教室史は、5章からなり、補遺として1980年度以降新任者一覧が掲載されている。第4編資料・年表は、各種委員や年度別進学者数および留年者数一覧をはじめ極めて詳細なものである。座談会を含め、全体として教養部はいかにあるべきかという問題意識を強く感じさせる部局史である。

九州大学理学部創立五十周年記念誌

1989年4月刊行。A5版。横書き。313頁。1.理学部50年のあゆみ(沿革と組織)、2.回想記、3.各学科・施設の現状、4.付録(理学部資料)からなっている。

1.理学部50年のあゆみ(沿革と組織)は、すべて表を用いて一覧風に記されている。2.回想記は、8人の元教官による回想記で、創立時代、戦中戦後、紛争時代を中心に記されている。とくに創立時代の記録は、他にあまり関係史料がないだけに貴重である。3.各学科・施設の現状は、各教室ごとに講座別に記されている。現状の紹介が中心で、なかには歴史的な記述を含むものもあるが、全体としてはそれほど多くない。4.付録(理学部資料)は、配置図等の地図が収録されている。

全体から受ける印象は、歴史書というより歴史を踏まえた学部紹介といった性格が強く、本書の標題が「年史」でなく、「記念誌」となっているのもこうした内容を考慮したうえでのことであろうと思われる。

九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿

委員長	○文学部	教授	有馬 學	医 短	教授	吉本 清一
副委員長	○石炭研	教授	東定 宣昌	医 病	教授	野瀬 善明
	○教育学部	助教授	新谷 恭明	歯 病	教授	池本 清海
	○法学部	教授	植田 信廣	生 環	助教授	北野 雅治
	○経済学部	教授	荻野 喜弘	熱 研	助教授	林 靜夫
	理学部	教授	柳田 壽一	情 セ	助教授	古川 善吾
	○医学部	教授	多田 功	ア イ セ	助教授	大崎 進
	歯学部	教授	坂井 英隆	中央分析	助教授	坂下 寛文
	薬学部	教授	前田 稔	遺伝情報	教授	服巻 保幸
	工学部	教授	前川 道郎	留 セ	助教授	田村 宏
	○農学部	教授	深尾 清造	有 化 研	助教授	菊池 純一
	○教養部	教授	馬場 典明	○大 型	助教授	古川 哲也
	総理工	教授	本地 弘之	図書館長		村上 幸人
	生医研	教授	木村 元喜	事務局長		澤川 俊明
	応 研	教授	中村 泰治	学生部長		菅野 道廣
	機能研	教授	西村 幸雄			
	健 セ	助教授	堀田 昇			
	言 文	教授	鬼塚 敬一			

○は専門委員会委員
(1993年12月1日現在)

受 贈 図 書 一 覧 (1993年7月~12月)

ちびた鉛筆		福岡県公共図書館郷土資料総合目録一追録5一平成5年度版
斎藤文男	1992. 2	
九州大学法学部同窓会名簿		福岡県立図書館・福岡県公共図書館等協議会
法学部同窓会	1993. 2	1993.11
古稀を迎えて		有明高専三十年誌
青峰重範	1982. 9	有明工業高等専門学校 1993.10
晴庭雨机		上武大学二十五年史
青峰重範	1985. 2	上武大学 1993.10
落 穂		豊田工業大学10年史
青峰重範	1989. 9	豊田工業大学 1993. 3
立正大学の百二十年		川並総合研究所 論叢1
立正大学学園企画広報室大学史編纂委員会	1992.10	聖徳学園川並総合研究所 1993. 3
		聖徳学園六十年の歩み
有明の海遙かに一石橋信彦教授一		聖徳学園川並総合研究所 1993.12
石橋信彦先生追悼文集発行事業会	1992. 8	工学院大学学園百年史
八潮市史研究 第7号		工学院大学 1993. 9
八潮市史編さん室	1989. 3	学園だより 第16号
八潮市史研究 第12号		学校法人大阪国際学園広報室 1993. 6
八潮市立資料館	1993. 2	GLOBAL MIND (学報) 第2号
八潮市史研究 第13号		学校法人大阪国際学園広報室 1993. 7
八潮市立資料館	1993. 3	九州大学法学部同窓会報 第18号
平成4年次八潮の地域新聞目録		九州大学法学部同窓会事務局 1993. 9
八潮市立資料館	1993. 3	九大医学部同窓会名簿 平成2年

九州大学医学部同窓会 恩師長沼賢海先生の思い出	1990. 9	柳川古文書館	1993. 3
井上忠・渡辺正氣	1993	大阪外国語大学70年史 大阪外国語大学70年史刊行会	1992.11
柳川古文書館史料目録第6集—渡辺家史料目録—			

大学史料室日誌抄録 (1993年7月～12月)

- | | |
|---|--|
| 7. 1 (木) 第5回九州大学史料収集・保存に関する委員会開催。
第4回運営委員会開催。
平成5年度大学史料室予算決定。 | 10. 8 (金) 第7回専門委員会開催。
西日本新聞記者「九州大学新聞」撮影のため来室。 |
| 7.13 (火) 九州大学75周年募金委員会開催。 | 10.14 (木)～15(金) 柴多講師、折田助手鳥取県立県民文化会館で開催された第19回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会に出席。 |
| 7.15 (木) 第6回専門委員会開催。 | 10.18 (月) 『大学史料室ニュース』第2号刊行。 |
| 7.29 (木) 書架搬入 (240号室・242号室)。 | 10.20 (水) 『大学史料室ニュース』第2号発送 (~10.26) |
| 8. 5 (木) 「九州大学創立75周年事業募金の残金の使用について」受領。 | 10.21 (木) 工学部彦坂熙教授より工科大学第1回卒業生鈴木雅次氏史料寄贈。 |
| 8.25 (木) 日経新聞記者大学紛争について取材のため来室。 | 11. 9 (水) 柴多講師、平成5年度九州大学中堅職員研修において「九州大学の歴史」講義。 |
| 9.13 (月) 『大学史料室ニュース』第2号原稿入稿。
図書雑誌所在情報検索サービス利用承認書受領。 | 11.18 (木) 柴多講師、折田助手東京大学東京大学史料室、八潮市立資料館視察。 |
| 9.20 (月) 石炭研究資料センターより「産業労働研究所紀要」バックナンバー寄贈。 | 11.19 (金) 藤野保文学部元教授より史料寄贈。 |
| 9.24 (金) 第5回運営委員会開催。 | 11.25 (木) 第6回運営委員会開催。 |
| 9.28 (火) 事務局長室より史料受領。 | 12.16 (木) 第8回専門委員会開催。 |
| 10. 1 (金) 『大学史料叢書』第2輯原稿入稿。 | |
| 10. 7 (木) 日経新聞記者紛争期写真撮影のため来室。 | |

九州大学大学史料室ニュース 第3号

発行日 1994年3月10日 (年2回刊)

編集行
九州大学大学史料室
福岡市東区箱崎6-10-1
電話 (092) 641-1101 内線 2298
印刷 九州大学印刷所

Archives of Kyushu University